

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 研究科 異文化コミュニケーション 専攻 異文化コミュニケーション		
指導教員	所属・職名	氏 名	
	研究科委員長	鳥飼 玖美子 教授 印	
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	個人 ・ <input type="checkbox"/> 共同 3名
研究課題	英語コミュニケーション一貫教育研究～公立の小・中・高等学校において～		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科・異文化コミュニケーション専攻・2003年度2年	小河 園子 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科・異文化コミュニケーション専攻・2003年度2年	小川 隆夫	
	異文化コミュニケーション研究科・異文化コミュニケーション専攻・2003年度2年	河野 敏也	
研究期間	2003 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

小学校での英語活動の時間等の導入に伴い、その効果、及び、発展性については、国民的関心事になっている。本研究においては、まず、小学校における効果的な英語（外国語）指導の一つの要素として、リズムの重視に着目した。小川隆夫の研究は、93名の児童を対象に、約半年間の指導の前後における、児童の発話について分析した。中学校での英語学習指導については、タスク活用の可能性などが、提案された。

一方、高等学校での英語学習指導においては、コミュニケーション能力の育成・及び評価について、小河園子が、40名の学習者について、質的研究を行った。一般的な言語運用能力テストの妥当性等についても研究した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[小学校英語教育] [英語コミュニケーション教育] [言語運用能力テスト]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の成果について、大きく二つにわけて報告する。すなわち、小学校・中学校・高等学校、それぞれの、公立学校現職教員による、教育現場における実践的研究の報告と、それらの連関についての報告である。

I. 個別的課題の研究**1 小学校英語活動におけるリズム指導の有効性 (小川隆夫)**

音声学・音韻論・超文節音素(リズム、イントネーション等)についての先行研究を参考に、実際の授業において、リズムを意識して教えた場合の、児童の発話の変化を6ヶ月間にわたり、観察・記録・評価した。

その結果、リズムを意識した指導の結果、児童の発話は、英語母語話者にとって、非常に聞き取りやすいものとなったことが、検証された。詳細については、小川隆夫の修士論文にまとめられている。

すなわち、公立小学校の子ども91人にリズムに重点をおいた指導を4ヶ月にわたり実施した。実験は、1.英語理解度調査、2.プレ・テスト、3.指導10回 4.ポスト・テストの順で行われた。その間にアンケート、実験2ヶ月後に定着の調査も行われた。

子どもの英語理解力調査は、25個の単語の理解度と10問の音韻認識力調査であった。この調査により、被験者たちは、他の学校と比較してもかなりの単語を認識していた。

5月に始まった実験は9月まで続き、ポスト・テストが行われた。ポスト・テストでは、5月と同じ定型表現の会話を読むこと。絵本は冒頭部分を暗唱させた。ポスト・テストは、ビデオ録画され、プレ・テストとともに、アメリカに送られ、10人のアメリカ人英語母語話者によって「分かりやすさ」の観点から評価された。結果は、定型表現会話は、t検定の結果、1組 $t(30)=3.55, p<.05$ 、2組 $t(28)=7.58, p<.05$ 、3組 $t(31)=7.41, p<.05$ とそれぞれにおいて有意な差が出た。絵本暗唱は、一元配置分散を行い、結果は $F(2,88)=6.61, p<.05$ であり、1組>3組、2組>3組の間に有意な差が認められた。リズムを重視した指導の有効性が検証された。

2 中学校英語学習指導におけるタスクの活用について (河野敏也)

コミュニケーション能力向上のための学習指導法のうち、特に、タスク(課題解決型学習)に焦点をあて、その活用により、文法的能力の定着が、どの程度たしかなものとなるか、研究を行った。

実際の授業の中で、生徒の学習意欲の向上、運用能力の向上の兆候は見られたが、文法的能力の定着についての、分析評価については、来年度以降の研究を待つことになった。

3 高等学校英語学習指導におけるコミュニケーション能力の育成と評価について

(小河園子)

コミュニケーション能力のうち、特に、会話維持能力に着目した。会話を滑らかに続けるためには、あいづち・繰り返し・明確化要求・言い直し、などが重要な役割を果たすことが、あらためて検証された。特に、異文化コミュニケーションにおいては、上記の要素についての文化的差異についての知識、経験、寛容性が大切である。

また、会話維持能力の測定法としての面接試験について、その限界と可能性の幾つかが、本研究をとおして明らかとなった。詳細については、小河園子の修士論文にまとめられている。具体的には、アクション・リサーチとして、10週間の会話練習と2回の面接を実施した。会話練習の基本は学習者同士のペア・ワークであり、まず、相手の発話に共感的に反応してから、自分の意見を付け加える練習を実施した。続いて、多様な立場から命題について考える練習、及び、簡易ディベートの形式で意見交換を行う練習を実施した。

研究成果の概要 つづき

題材は、食べ物に関する好み等、身近な話題から、環境問題等、社会性のある話題へ発展させた。

会話練習の効果の検証には、教育評価として実施した面接の録音記録を用いた。この面接は、英語母語話者である語学指導助手と日本語母語話者の英語教員(筆者)が、それぞれに、学習者と約3分間、英語で会話をする形式で行った。題材は、会話練習の内容に準じたものとし、間隔をおいて2回実施した。

会話練習によって多くの学習者が、より自信を感じさせる話し方(視線・声の大きさ・発話の明瞭さ等の総合的な印象)ができるようになり、反応時間が早くなり、自主的な発話の追加が増えたことから、一定の効果が確認された。特に、つなぎの音声(filler)、相手の発話に対するあいづち、抑揚、ジェスチャー、ユーモアなど、語用論的能力が向上し、一つの談話(discourse)が生まれ展開するようになった。

一方、教師対生徒という力関係が反映してしまう面接の形式では自然な会話の成立が難しく、会話能力の巨視的・包括的な評価には限界があることが明らかとなったが、試験者の対応によっては、新たな可能性が開けることがわかった。

それは、面接での会話の展開に自由度を容認することで、学習者の社会的主体性の発揮及び自発的な意味交渉、また、試験者からの足場組み(scaffolding)や言いなおし(recast)を通して、言語習得を促進する契機とすることができる可能性である。総合的に見て、教室内言語活動としての「やりとり」の意義を確認することができた。以上の内容は、第二言語習得理論・言語教授法・社会文化理論・発達心理学といった関連分野の文献に照らしあわせても、妥当性の高いものと判断される。

本研究の結果から、実践面では次のようなことを提案することができる。

- (1) 社会的文化的存在として学習者をとらえる立場から、コミュニケーション活動のうち、機能主義的な方法についての再検討。
- (2) 試験者としての教師も社会的文化的存在として会話に参加するという認識から、日本語を母語とする英語教師の役割の再認識。
- (3) 面接形式の会話能力試験の限界を認識した上での有効活用。

なお、国内外の研究動向から、教室における「ことばのやりとり」の効果について、継続的な実証研究を続けていく意義は、充分にあると思われる。

II. 小中高大の一貫教育について

① 音声面について

小川の研究によって明らかになったように、英語指導の初期において、リズムを重視することには、一定の成果が期待される。中学校・高等学校と進むにつれて、表現する内容が複雑になっても、リズムが伝達の効果を高めることは、小河の研究の中でも観察された。より緊密な一貫的指導の方向性の提示や教材開発が望まれる。

② 文構造の定着について

小川の研究では、定型表現の指導から、その応用の過程において、新しい文を作り出す表現力の萌芽が見られた。このことは、小河との連携による共同授業(平成16年2月6日(金))においても観察された。河野の研究においては、タスクを用いた活動により、学習者が、既習の表現を未知の状況において運用する能力できるようになることが期待された。小河の研究ではさらに、特定の話題に関するやりとりの中で、学習者が自主的に、誤りを訂正したり、的確な表現法を模索したりする傾向が見られた。学習の適時性に着目した研究の必要性が再確認された。

③ 文脈への意識について

小川の研究では、絵本の学習を通して、ひとかたまりとしての文章の流れに、自然に親しむ環境が有効であることが示唆された。河野の研究では、場面の設定をとおして、文脈への意識を形成することが試みられた。小河の研究では、文脈は、会話の当事者同士が共有し生成していく性質のものであることが洞察された。これは、指導するというより、学習者の習得をいかに支援するかが、重要な領域であると思われる。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌

(鳥飼玖美子・小川隆夫・河野敏也・小河園子)

“小中高一貫英語教育”を考える

大修館英語教育 増刊号 p 61～p 69

第52巻8号 2003年10月5日発行

② 図書

(松香洋子) 丸善株式会社 「発想転換の子ども英語」

小川隆夫の実践を取材したもの。 2003年 189ページ

③ シンポジウム

立教大学異文化コミュニケーション研究科シンポジウム

2003年 7月26日(土)

小中高一貫英語教育を考える (小川隆夫・河野敏也・小河園子)

④ その他

横浜「言語と人間」セミナー

2003年春季合宿シンポジウム演者：小河園子

2003年5月例会講師：小川隆夫

埼玉県戸田市教育委員会研究指定校 研究授業

2004年 2月6日(金)

授業者：小川隆夫(戸田市立新曾小学校4年1組)

協力者：小河園子(埼玉県立南稜高等学校普通科・外国語科代表生徒)

リズムを重視した指導を受けた小学生の英語活動に、高校生16名が加わり、英会話の相手をつとめる。